(石崎文庫)　　2017.9.6/9.13

藤之助別家（大木家文書 524）

(表紙)
天明四甲辰年(1784)

藤之助別家
指置ゆす(譲)り品
書き記す覚帳

十一月二十八吉日

(p.1)
藤之助の事を記す。
桂沢の藤内の子孫
亥の年(宝暦5年(1755))餓死、手廻り皆川口町
ひ(非)人小屋へ入り、御上様よりの
御助けにて居り、皆死に申し候(そうろう)ところ、荒助
は此の辺に付け居り、同(堂?)内に参じ候て、
寄り無き所(ところ)に、畑中の重助はえんちゃ(縁者)
候間(あいだ)、助け下さるべく候由(よし)申され候間、
手前にて〈ひろい置き〉、名宗門に付け、助け置き候
所に、吹張(ふっぱり)御同心清七と申す者、
宝暦十一年巳(1761)正月十九日に
参じ候て、此方に居る荒助は拙者
書入貸し銭者に候間、相渡し
申すべく候と、明和二年(1765)迄五年
間御同心清七沙汰懸りにて、
相渡し候得(そうらえ)ば、荒助一生かい(涯)身
をすたり申すべく候間、相渡し申さず。
扨扨(さてさて)逢着(ほうちゃく)仕(つかまつ)り候得共(そうらえども)、此方のかけにて
助かり居り、其の後当所喜平の
女子(おなご)女房に取りむい、子供段々

(p.2)
生れ出指置(さしおき)き、其の上
伊勢参宮も致され、其の上子供

三太郎と申すは年十二、弟次郎と申すは
年五つ。手廻り四人、百目木屋敷
別家に指置き申すべき筈に心懸け、
木材工等迄調え置き候得共、藤之助
町へ引越下さるべきと願い候間、
手前の勝手相成らず候得共、
願いの通り此度町へ〈町の御長屋へ〉別家に
引移し、尚又取らせ預け候
物左記

覚

一　田百刈　　平左衛門作
　　高一石五斗五升
一　畑百刈　　孫七郎作
　　高三斗二升六合
一　畑二百刈　　平三郎昨
　　高六斗六升
一　田二百三十刈　　与左衛門分
　　九郎預け分
高〆

(p.3)
一　一疋　　馬
一　一工　　鍬
一　二枚　　草刈・葉切　鎌
一　片馬　　種籾(もみ)
一　三駄　　稗
一　一駄　　大豆
一　二升　　小豆
一　二斗　　米
一　一斗　　餅米
一　一斗　　麦
一　二升　　粟
外に
一　家移り米銭諸入方記
　　不申候

一　四枚　　古畳
一　六枚　　筵(むしろ)畳
一　十枚　　筵
一　四ツ　　鐺(なべ)
　　二十人十五人五人三人鐺

(p.4)
一　十人前　　椀　新キ
一　十枚　　膳
一　はし　　五十人分
一　二ツ　　茶碗
一　一から　　するす(摺臼)
一　一ツ　　うす・きね共
一　一枚　　み
一　二ツ　　味噌・つけ　桶
一　二ツ　　水桶
一　一ツ　　け桶
一　一ツ　　こひさけ
一　一重　　四重
一　四本　　へら・しゃくし
一　一枚　　ほうちやう(包丁)
一　一枚　　さいはん(菜板、まな板)
一　一ツ　　昼箱

(p.5)
一　一引〈ひき〉　　から戸
一　一ツ　　升
一　一ツ　　茶箱
一　一ツ　　四角
一　二枚　　盆

此の外、板戸、しとみ(蔀)、そさく、
薪木、馬かい料、□京茶、
大とん、千は(千歯こき?) 等は記し申さず候。

一　糸入れ一ツ、木綿指物一枚、
　　帯、帷子(かたびら)一枚、袷(あわせ)一枚、単物、

〆て六品、外は記し申さず。　　藤之助

一　わた入れ、指物、帷子二枚、はたき(肌着)、

せひ二ツ、木綿指物、　　とま

〆て八品、

外は記し申さず候。

天明四甲辰年(1784)十一月二十八日大吉移り。

(裏表紙)

藤之助子供三太と申す者むすめ一人

あり、太田村清蔵と申すものむご(婿)へもらい

有られ候所、相続持ち兼ね、田畑共相渡し、

天保四年巳(1833)の凶作に仙台岩谷堂

在へ出本(奔)仕り候。扨々(さてさて)世話かへ(甲斐)のなきもの也。

藤之助別家致

事

(以上)